

指導資料



鹿児島県総合教育センター

社会 第103号

—中学校、盲・聾・養護学校対象—

平成17年5月発行

基礎・基本の定着を図る中学校社会科学学習指導の充実

—平成16年度「基礎・基本」定着度調査の結果を踏まえた指導法の工夫—

鹿児島県教育委員会では平成15年度に引き続き、平成16年度「基礎・基本」定着度調査を実施した。この調査は、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容のうち、「読み・書き・算」等の基礎学力について県全体の実態を把握するとともに、各校の課題を明確にし、児童生徒の個に応じたきめ細かな指導法の改善に資するなど、基礎・基本の定着を目的としたものである。

平成15年度の調査は、小学校第4学年、第6学年及び中学校第3学年の全児童生徒の約10%を抽出し、国語、算数・数学、英語の各教科と意識調査という内容で実施した。

それに対して平成16年度の調査では、小学校第5学年において国語、社会、算数、理科及び意識調査を、中学校第1学年及び第2学年において、国語、社会、数学、理科、英語及び意識調査を、該当学年すべての児童生徒を対象に実施した。

こうした調査内容と調査対象の拡充により、基礎・基本の定着状況をこれまで以上に明確にとらえることができるとともに、より一層きめ細かな指導を実現することが可能となった。

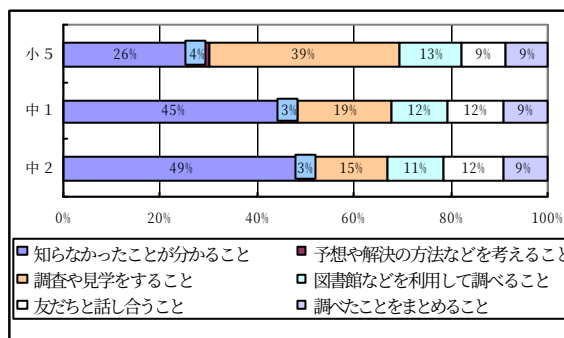
そこで、本稿では社会科の定着度調査結

果について分析し、そこから基礎・基本の定着を目指す社会科学学習指導法の工夫について述べる。

1 意識調査の結果と考察

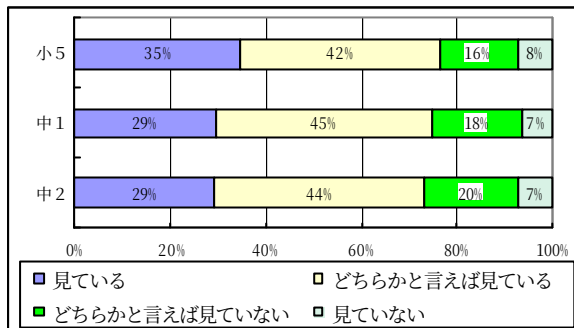
今回の意識調査は、社会科の学習に関する意識の傾向について質問紙法により、実施した。ここでは、その中から特に顕著な傾向がみられたものについて述べる。

社会の授業で好きなことは何ですか。



小学校第5学年では、「調査や見学をすること」が好きと答えた児童の割合が高い。また、中学校では、学年が上がるにつれて「知らなかったことが分かること」を好きと答えた生徒の割合が高くなっており、中学校第2学年においては、約半数を占めている。児童生徒の興味・関心の特性等を踏まえた指導の工夫が必要である。

あなたは、世の中の出来事を知るために
新聞やニュースを進んで見えていますか。

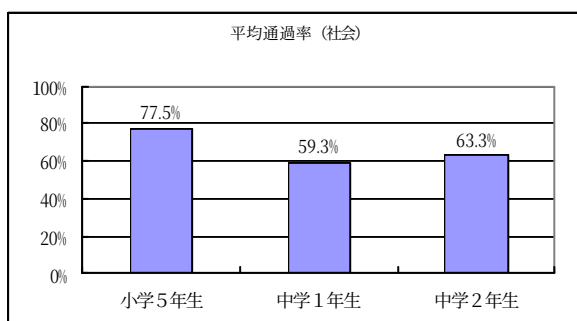


すべての学年で、約70%を超える児童生徒が新聞やニュースを「見ている」「どちらかと言えば見ている」と答えている。

見ている内容や理解の程度から、児童生徒の興味・関心の実態を把握するとともに、新聞等を利用し、身近な生活と結び付けた社会科学習への効果的な活用を図ることが必要である。

2 学力調査の分析と考察

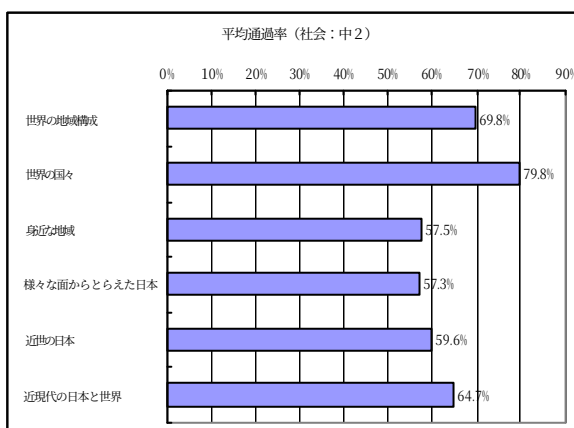
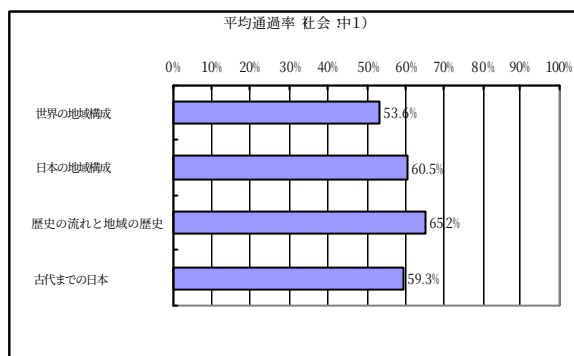
定着度調査における社会科の結果は、下図のように第1学年が平均通過率59.3%，第2学年が63.3%であり、基礎・基本の定着度は約6割である。小学校第5学年の平均通過率が77.5%であることを考えると、学習内容や方法に関する小・中学校の系統性等を踏まえた指導の工夫が求められる。



(1) 領域別平均通過率

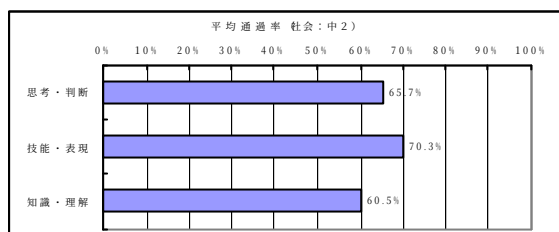
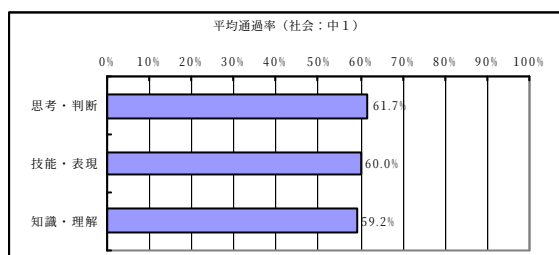
地理的分野では、第1学年「世界の地域構成」、第2学年「身近な地域」、「様々な面からとらえた日本」が低い傾向にある。歴史的分野では、第1学年「古代までの日本」、第2学年「近世の日本」が低い傾向にある。

地理的分野では、地球儀や各種の地図



などを基に、様々な地域の特色等を具体的にとらえさせる指導の工夫を図るとともに、定着させるために繰り返し学習することができるよう、意図的・計画的に指導する必要がある。また、歴史的分野ではそれぞれの時代の歴史的事象や用語を覚えるだけの学習ではなく、事象の背景や時代の特色などに関連付けてとらえさせる指導を更に工夫する必要がある。

(2) 観点別平均通過率の結果



第1，第2学年ともに他の観点に比べて「知識・理解」の通過率が低い傾向にある。社会事象に関する基礎的知識を確実に理解していないと思われる。知識を単なる暗記で身に付けさせるのではなく，可能な限り生徒の身近な生活と関連付けて地理的事象や歴史的事象をとらえさせたり，事象の仕組みや背景なども理解させたりする必要がある。

また，前述の意識調査では，社会科の授業で好きなこととして，「知らなかったことが分かること」と答えた生徒の割合が多かったことを考えると，社会事象に関する基礎的知識を確実に身に付けさせることが学習の成就感を高め，社会科の授業の好きな生徒を育てることにつながると思う。

3 学力調査からとらえる改善の視点

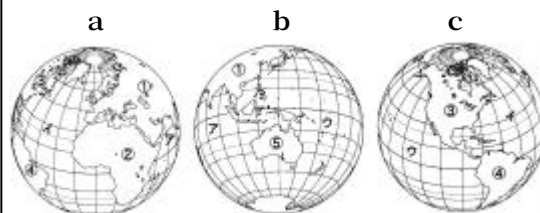
基礎・基本の確実な定着を図るため，本調査で平均通過率の低かった問題を基に，今後の指導の改善策について述べる。

(1) 地理的分野における問題点

第1学年で通過率の低かった「世界の地域構成」からの出題である。

1－(3)

下の資料のa～cの図は，地球を三つの方向からみた半球図である。これらの図中に番号や記号で付けた大陸名や海洋名の組合せとして正しいものを，下のア～エから記号で選べ。



- ア【① ユーラシア大陸 ② 南アフリカ大陸
ア インド洋】
イ【② オーストラリア大陸 ③ 北アメリカ大陸 イ 太平洋】
ウ【② アフリカ大陸 ③ ユーラシア大陸
ウ 太平洋】
エ【③ 北アメリカ大陸 ④ 南アメリカ大陸
イ 大西洋】

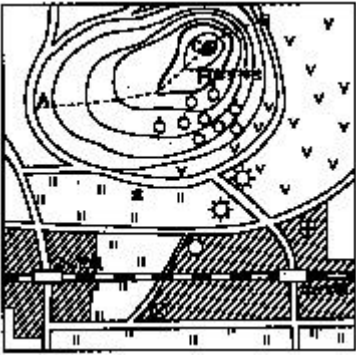
正答〔エ〕 通過率（55.4%）

解答に当たっては，大陸と海洋のそれぞれの名称と位置を確実に理解しておくことが必要である。大陸名や海洋名の知識とともに，その位置について1枚の世界地図に表現された分布だけでなく，球面上の位置関係をとらえることが不十分であったと推察される。

また，正距方位図法を使い，「サンフランシスコからみた東京の方位」を答える問題も通過率が低かった（44.6%）。正距方位図法が中心からの距離と方位が正しく表される図法であるという知識はあるものの，地図上での方位を正確には理解できていなかったと思われる。

第2学年では、「身近な地域」に関する次の問題の通過率が低かった。

3-(1)
資料の「よしだ駅」から「なかつ駅」の間は6cmある。実際の距離は何mか。



正答 [1,500m] 通過率 (35.6%)

誤答傾向としては「150,000m」や「600m」が多かった。問題文には、「2万5千分の1の地形図」であることが明記してあるが、縮尺の意味理解や地図上の長さを実際の距離に計算することが理解できていなかったと思われる。

また、「様々な面からとらえた日本」の問題は、環太平洋造山帯に属する日本の特色を世界的視野から考える内容であるが、通過率は51.1%であった。環太平洋造山帯という語句は知っていても、その特色の理解が不十分であったと思われる。

(2) 地理的分野の指導法改善の視点

学習指導要領に示された地理的分野の目標に、「地域的特色をとらえるための視点や方法を身に付けさせる」という内容がある。身近な地域に限らず、地理的分野の学習では地図等の資料活用能力を育成することが重要である。そして、諸事象を位置や空間的な広がりとのかわ

りでとらえたり、共通性や特殊性などの視点から考える力を養う必要がある。

例えば、次に示すような地理的事象の概観のさせ方や地図等の活用の要点を参考にして、地理的事象を多面的・多角的に考察し、適切に表現する能力や態度を育てなければならない。

〔地理的事象の概観のさせ方〕

- ① どこに、どのようなものが、どのように広がっているのか、地理的事象として見いだすこと。
- ② 地理的事象がなぜそこでそのようなみられるのか、なぜそのように分布したり、移り変わったりするのかなどを人間の営みとのかかわりでとらえる。
- ③ そこではみられないのか、他の地域にもみられるのかなどを追究する。
- ④ 地理的事象がみられるところは、どのようなより大きな地域に属し含まれているのか、逆にどのようなより小さい地域から構成されているのかを考える。
- ⑤ 地理的事象はいつ頃からみられたのか、これから先もみられるのかなど地域の変容をとらえる。

(中学校学習指導要領解説社会編)

〔地図（地球儀）活用の要点〕

○ 小学校における指導の要点

- ① 教科用図書の地図（地図帳）は、第4学年から使用する。
- ② 社会科だけではなく他の教科等の学習や家庭などでも活用する。
- ③ 都道府県の名称と位置を日本地図で調べ、関係のある国や地域も名称と位置を世界地図などで確認する。

○ 中学校における指導の要点

- ① 年間指導計画に地図活用の指導計画を位置付ける。
- ② 小学校での学習状況をふまえ、一人一人の地図活用力を把握する。
- ③ 地形図や各種の地図に慣れさせたり、コンピュータの活用を図る。

(3) 歴史的分野における問題点

第1学年では、「古代までの日本」に関して次の問題の通過率が低かった。

5-(1)
写真や説明に基づき、この時代の特色として不適切なものを選ぶ。



魔よけや食物の豊かさを祈るのに使われたとされる

ア 貝塚
イ 縄文土器
ウ はにわ
エ 弓矢

正答〔ウ〕 通過率 (26.9%)

5-(5)
中国の歴史書に記された日本の様子から当時の中国に当てはまる内容を選ぶ。

その国の王はもとは男であったが、戦乱が続いたので国々が共同して女の卑弥呼を王に立てた。卑弥呼は神に仕え、人々の心をひきつけるふしぎな力を持っていた。

※語群省略

通過率 (42.3%)

土偶という名称は知っているが、その時代や前後の時代の特色の理解が不十分であると思われる。また、「卑弥呼」や「魏志倭人伝」という語句は知っているも、日本の歴史とのかかわりの中で当時の中国の様子を理解できていないと思われる。

第2学年では、「近代の日本」に関して次の問題の通過率が低かった。

5-(3)
アヘン戦争の結果、イギリス領となったホンコン（香港）の場所を地図から選ぶ。
(※地図省略)

通過率 (37.8%)

7-(4)
大正時代の大衆文化の例として不適切なものを選ぶ。
(※語群省略)

通過率 (50.6%)

ホンコンについては歴史的分野からの出題であるが、位置の理解があいまいであったと思われる。また、大正時代の大衆文化の例として不適切なものを選ぶ形式であったが、時代の特色を社会情勢からとらえるという学習が不十分であったと思われる。

(4) 歴史的分野の指導法改善の視点

歴史的分野の基本的な目標は、「歴史的事象に対する関心を高め、我が国の歴史の大きな流れと各時代の特色を世界の歴史を背景に理解させる」ことである。

各時代の特色を理解させるには、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色などに着目して他の時代との相違点や共通点を明らかにすることが大切である。

そのためには、次のような視点で歴史的分野の指導を行うことが必要である。

《歴史的分野の指導の要点》

ア 時代の流れを概観できる

- 「歴史の流れと地域の歴史」学習では、時代の移り変わりに気付くことができるような主題で、生徒自らがまとめる作業的な活動を促進する。

イ 世界の歴史と関連付ける

- 歴史学習の中心は、我が国の歴史の大きな流れを理解させることであり、その背景としての世界の歴史についても関連させて学習を進める。その際、地図等を有効に活用し、地理的条件にも着目させる。

4 社会科学習指導の充実のための改善策

定着度調査の結果から特に通過率の低かった地理的分野、歴史的分野の問題を中心にその特徴を述べてきた。ここでは、今回の調査では含まれなかった公民的分野も併せて、次の《改善の要点》を参考にしながら社会科全体としての指導の充実を図るとともに、生徒一人一人の確かな学力を育成していくための改善策について述べる。

《改善の要点》

- ア 小学校との関連を図る。
 - ・ 小学校での学習内容を知る。
 - ・ 小学校での学習方法を生かす。
- イ 指導と評価の一体化を進める。
 - ・ 単元レベルの評価計画を作成する。
 - ・ 評価を生かした指導計画を工夫する。
- ウ 社会科の学び方を身に付けさせる。
 - ・ 1単位時間や単元での課題解決的な学習過程をモデル化する。
 - ・ 選択教科や他の教科等との関連を図る。

(1) 学習指導要領の理解

社会科で育てたい「基礎・基本」を明確にし、適切な指導計画を作成するため、改めて学習指導要領を精読し、学習指導の工夫・改善に活用してほしい。

【学習指導要領改訂の要点】

- 1 教科の目標については、学習の過程を重視し、学び方を学ぶ学習を一層重視する
- 2 知識の詰め込みに偏った学習にならないよう、内容を厳選する。
- 3 生きる力をはぐくむ教育を推進する観点から、社会科では各分野の特質に応じて、見方や考え方を身に付け、調べ方や学び方を学ぶ学習の充実を図る。
- 4 国際化の進展等社会の変化に対応する観点から、各分野の特質を生かして内容の刷新、更新を図る。
- 5 教科の基本的な構造に留意し、各分野の関連を重視した学習を促す観点から、3分野を関連付けて扱う項目を設定した。

(2) 小学校との関連の把握

学習指導要領で中学校社会科の目標及び内容、指導計画の作成と内容の取扱いを理解した上で、小学校社会科の学習についても把握することが重要である。

次に示すのは、小学校学習指導要領の社会科第5、6学年の目標である。中学校との関連では、第5学年で主に地理的分野、第6学年で歴史的分野及び公民的分野の学習を行っている。

《小学校第5学年 目標》

- (1) 我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の産業の発展に関心をもつようにする。
- (2) 我が国の国土の様子について理解できるようにし、環境の保全の重要性について関心を深めるようにするとともに、国土に対する愛情を育てるようにする。
- (3) 社会的事象を具体的に調査し、地図、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、社会的事象の意味について考える力を育てるようにする。

《小学校第6学年 目標》

- (1) 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする。
- (2) 日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方及び我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする。
- (3) 社会的事象を具体的に調査し、地図や年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに社会的事象の意味をより広い視野から考える力を育てるようにする。

小学校との関連を強めるためには、学習指導要領による理解を基に、小学校で使用する教科書や地図帳の内容を調べる必要がある。また、小学校の授業を参観したり、学習の進め方等について情報交換したりすることも有意義である。

(3) 指導と評価の一体化

目標に準拠した評価を行うためには、次の要件が必要である。

ア 学習指導のねらいが明確になっていること。

イ 学習指導のねらいが実現された状態が具体的に想定されていること。

ウ 学習指導のねらいが実現されたかどうかを評価する方法・手段が準備されていること。

さらに、評価を指導に生かすためには生徒が具体的な達成目標を理解しておく必要もある。教師自身が指導目標を具体化し、単元の指導計画に評価計画も位置付けると効果的である。その実践例を紹介する。

《単元の評価計画例「第1学年歴史的分野『戦国時代から全国統一へ』》

評価場面と主な学習内容（●郷土素材）	時間	評価基準				個に応じた深まり場面
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	指導の手だて
1 戦国時代 単元の学習について、必要な視点を話し合う場面 ○戦国時代の概要 ●南九州の戦国大名分布	1	戦国時代に関心を持ち、単元の学習に必要な視点を話し合おうとしている。 【観察】		【評価方法】 ノート：プロセス、知識の構造化 計画書：自己課題・仮説追究計画書 テスト：確認テスト 観察：発表内容、学習態度など		教師が話し合いに必要な資料を提示する。
2 鉄砲伝来 信長の天下統一事業と鉄砲との関係について分析する場面 ●鉄砲の伝来 ○戦国時代と鉄砲 ○信長の鉄砲政策	1		鉄砲と信長の天下統一事業の関係を目的・手段・方法の視点から考察している。 【ノート、計画書】			分析した結果を自分なりに整理し、まとめることができる。 分析結果の例を提示し、考察するポイントをつかませる。
7 ヨーロッパ人の来航の背景 当時の日本とヨーロッパとの関係を構造化する場面 ○アジアの物産を求めて ●宗教改革とイエズス会	1		他の生徒が構造化したものを参考に修正を加えることができる。 【ノート】	信長や秀吉、家康が台頭した理由を対外的な関係を踏まえて構造化することができる。 【ノート】		ヨーロッパの歴史を背景に、構造化することができる。 3人の対外政策を示す資料を提示する。

(鹿児島大学教育学部附属中学校社会科の実践を基に作成)

(4) 社会科における学び方の習得

社会科の学習は、ややもすると学習の過程よりも結果が重視され、事実認識の結果を覚える学習になりやすいという側面がある。また、定着度調査からも社会事象の表面的な理解による誤答傾向がみられた。学習内容を厳選し、社会事象の意味を確実に理解する学習を展開していくために、社会科における学び方を習得

させたい。

学習課題を設定し追究する学習は小学校でも行っているが、教科担任制で学習内容が深化する中学1年生段階では学習の進め方にとまどう生徒も多い。

そこで、各分野の特質を踏まえた上で意図的・計画的に単元や1単位時間の学習の進め方を繰り返し学ばせることが重要である。

《単元の学習過程モデル》

学習過程	育てたい力	指導上の留意点
1 概要把握	○ 単元全体を概観できる。	1 概観する視点を示し、単元の全体像をとらえさせる。(学習内容の象徴的資料提示等) ※ 教える事項と考えさせたり、作業させたりする活動とを明確に区別する。
2 学習計画作成(全体)	○ 学習の進め方が理解できる。	2 単元の学習計画表を使い、学習の見通しをもたせる。(単元の自己評価カード等)
3 個人課題設定	○ 既習事項等を生かし個人課題を設定できる。	3 単元の学習範囲内で一人一人の興味・関心を生かした課題を作らせる。
4 学習計画作成(個人)	○ 学習に必要な教材や方法を予想できる。	4 ペア学習やグループ学習も取り入れ、学習計画の見直しをさせる。
5 課題追究(個人)(全体)	○ 計画に基づき粘り強く活動が続けることができる。 ○ 他者の学習から相互に学び合うことができる。	5 計画的に評価し、必要に応じて軌道修正のための助言を行う。 ※ 一人一人の主体的学習を中心にしながら集団の中での練り合いの場を設ける。
6 課題解決(個人)(全体)	○ 単元全体の学習を要約できる。 ○ 自分の学習状況について評価できる。	6 個人課題の追究成果を発表させる場を工夫する。(パソコン活用等) ※ 理解不十分な事項を明確にさせ、補充学習等で定着を見届ける。 (単元の自己評価カード、単元テストなど)

単元の学習過程モデルとともに、1単位時間の学習過程についても基本的なモデルを作成し、学習目標を明確にしたり学習内容を精選したりすることによって指導の充実を図ることが大切である。また、資料提示や学習方法の工夫によって、生徒の社会科学学習への興味・関心を高め、資料活用の視点を示すことや、ワークシート等の活用により、社会科の学び方を具体的に身に付けさせる必要がある。

「基礎・基本」定着度調査の結果を基に、社会科学学習指導の在り方について述べてきたが、本稿は、調査結果の全体的な傾向から指導法改善の視点を紹介したものである。各学校においては、全体的傾向に基づいた課題の焦点化とともに、生徒一人一人の実態に応じた改善策が講じられることを期待したい。

(教科教育研修課)